＜研究報告＞

「隣接ペア」再考

薄　井　　明*

抄　録：「隣接ペア」は会話分析の最重要概念となっており、疑問の余地のないものであるかのように長く扱われてきたが、その定義はかなり形式化されたものであり、それゆえの曖昧さを伴っている。その結果、隣接ペアは一様なものと見なされてきた。この形式的な一様性に対し、隣接ペアを定式化したシェグロフ自身が3つのペア・タイプを区別している。確かに、彼の見方は発話間の関係を理解するうえでは有用だが、隣接ペア相互の関係や隣接ペアと会話全体との関係を分析するにはあまり役に立たない。そこで、会話構造という観点を導入することによって、個々の隣接ペアの独自性を明確にし、会話の全体構造の見取り図に位置づけることが可能になる。

キーワード：隣接ペア、ペア・タイプ、会話構造

1.　序

エスノメソドロジーを理論的背景として1970年代初頭に創始された「会話分析（Conversation Analysis）」は、現在、出身母体である社会学の領域を超えて一定の無視できない影響力をもつに至っている。もともと会話分析は、「言語」への関心からではなく、あくまで「相互行為状態にある会話（talk-in-interaction）」に対する関心から発展してきたが、次第にその成果が言語学へも影響を与え、言語学のうち語用論（pragmatics）や談話分析（discourse analysis）では、会話分析の諸概念や諸理論はその不可欠の知識とさえなっている（Levinson 1983；Coulthard 1985；Stenström 1994）。

なかでも「隣接ペア（adjacency pairs）」は、「ターン・テイキング（turn-taking）」とともに、会話分析では最重要概念に位置づけられている。隣接ペアとは、「出会いの挨拶－出会いの挨拶」「質問－返答」「呼び出し－応答」等の定型化された発話のペアのことである。「相手に質問されればこちらは返答しなければならない」といった規範的な事実は、指摘されてみれば当然だと思われるが、録音データに基づき、会話的相互行為における定型的な構造を抽出し、それらを「隣接ペア」として同定したことは、会話分析の重要な功績だといえる。

会話分析の草創期に早々定式化された「隣接ペア」に関しては、その後、ペアを成す定型的なシークエンスの新たな“発見”による外延の拡大（Pomeranz 1978；Drew 1998）や、隣接ペアにおける「三部構成」構造の一部容認（Levinson 1983；Heritage 1984；Schegloff 1988）、すなわち「ペア」性＝「二部構成」性の部分的修正が行われてきた[1]。ただし、隣接ペアの「定義」に関しては、全く変更はなされていない（Schegloff 2007：13－14）。というより、「隣接ペア」概念に対しては、会話分析の内部・外部から疑義や批判はほとんど提出されてこなかった。隣接ペアは、いわば“疑問の余地のない”概念であるかのように扱われてきたのである。

しかし、隣接ペアは、本当に“疑問の余地のない”概念なのだろうか。以下、本論で試みるのは、隣接ペアの「一様性」をいったん解体し、一様性の外観の陰に隠れてきた各「隣接ペア」の独自性を摘出し、それぞれを適切な場所に位置づけていくことである。そして、こうした作業を通して、「隣接ペア」と一括されて平板に理解されているシークエンスを、より構造的に捉えていこうと思う。そのために、「ペア・タイプ」という観点のほかに、「会話構造」[2]の観点を加えて考察していく。

2．隣接ペアの下位タイプ

ふつう私たちは会話をしているとき、例えば「こちらが質問すれば相手は返答してくれるはずだ」といった相互行為上の期待を抱いたり、「相手から挨拶されたらこ

＊人間基礎科学講座

ちらも挨拶を返さねばならない」などの相互行為上の責務を感じることがある。こうした規範的で定型的な発話ペアとして、会話分析では「出会いの挨拶－出会いの挨拶」「呼び出し－応答」「質問－返答」「申し出－受け入れ／断り」「要請－受け入れ／断り」「誘い－受け入れ／断り」「提案－同意／不同意」「評価－同意／不同意」「苦情－謝罪／言い訳」「別れの挨拶－別れの挨拶」等が指摘されている。そして、これらを包摂する上位概念が「隣接ペア」であり、次のように定義されている。

「(1) 2つの発話という長さをもち、(2) 構成要素である2つの発話が隣接した位置を占め、(3) 各発話を別の話者が発する。(……)(4) 各成分が相対的な形で配列され（第一ペア成分が第二ペア成分に先行する)、(5) 弁別的な関係をもっている（第一ペア成分が属しているペア・タイプが第二ペア成分における選択に関連してくる)」(Schegloff & Sacks 1973：295－296)

確かに、この定義は、「出会いの挨拶－出会いの挨拶」をはじめ隣接ペアに数えられている発話ペアの全部に妥当しており、一見そこに問題はないように思われる。しかし、この定義はかなり形式化されたものであり、その形式性（厳密性ではない）ゆえに曖昧さを呼び込んでいる。すなわち、隣接ペアという用語のもとに、相互に異質な発話ペアの諸タイプが「一様」であるかのように扱われているのである。実際、「隣接ペア」概念を定式化した1人であるシェグロフ自身が、後に、この概念にまつわる誤解を解くという文脈で、隣接ペアにおけるペア・タイプの違いを次のように強調している。

「ペア・タイプの例として「質問－返答」、「出会いの挨拶－出会いの挨拶」、「申し出－受け入れ／断り」を挙げた場合、第一ペア成分と第二ペア成分の関係が全く異なるタイプが含まれていた。「出会い挨拶－出会いの挨拶」には、同族目的語（同一の挨拶用語も含む）の交換が含まれる。「質問－返答」には、補完的なターンのタイプが含まれるが、それらは相対的に特定されていない。「申し出－受け入れ／断り」には、限定された数の、確定された、択一的な反応のタイプが含まれる。」(Schegloff 1988：110－111)

言い換えれば、発話間の関係からみると、「出会いの挨拶－出会いの挨拶」(同類の発話を交換するタイプ)、「質問－返答」(第一ペア成分と第二ペア成分が補完的な関係にあるが、両者の関係はあまり特定されていないタイプ)、「申し出－受け入れ／断り」(第二ペア成分は限定されているが、択一的な反応が許容されるタイプ）は、相互に異なったペア・タイプだということである。

もちろん、シェグロフはこれら3つのペア・タイプで隣接ペア全てを網羅できるとは述べていないが、少なくとも挙げられた例に関しては、この区別は妥当だと思われる。特に3番目の「申し出－受け入れ／断り」タイプには、一定数の隣接ペア（その他「要請－受け入れ／断り」「誘い－受け入れ／辞退」等）が含まれるし、それらはともに第二ペア成分における「優先構造（preference organization)」という重要な論点に関わっているという点で、独立したグループを構成するといえる。

ただし、1番目の「出会いの挨拶－出会いの挨拶」タイプや2番目の「質問－返答」タイプが、「申し出－受け入れ／断り」タイプと同じように、独立したグループを成すものなのか、また、ペア・タイプの分類として3つでよいのか、さらに、第一ペア成分と第二ペア成分との関係以外に分類する基準はないのか等に関して、シェグロフの記述から明確な答えは引き出せない。これらの問いに一定の解答を与えていくことが本論の目的であるあるが、便宜上、シェグロフが提出した3つの分類に従って、検討していくことにする。

(1)「出会いの挨拶－出会いの挨拶」タイプ

「出会いの挨拶－出会いの挨拶」タイプに分類される隣接ペアとして、「出会いの挨拶－出会いの挨拶」と「別れの挨拶－別れの挨拶」がまず挙げられる。なぜ「出会いの挨拶（greeting)」と「別れの挨拶（farewell)」を区別するかというと、各々を表す英語が異なっている点や各挨拶が導いていく展開の方向が正反対である点だけが理由ではなく、会話の「開始部」と「終結部」で発話組織化の構造に違いがあるからである。会話の「開始」も「終結」も達成される（achieved）協働作業であるが、「終結」の方がやや複雑で段階的な過程を経る傾向がある。すなわち、会話の終結部では、まずその開始地点で会話を締め括っていく発話交換＝「終結の前置き（pre-closing)」(例：「はい、じゃあわかりました」－「そうですか」）がなされ、その後に「別れの挨拶」の交換（例：「じゃあ、また」－「それじゃ」）が行われるのがふつうである。その意味で、「終結の前置き」の交換も、「別れの挨拶－別れの挨拶」に準じた隣接ペアに分類できる。これらは、同類の発話を交換する点、あるいは「第一ペア成分に対し第二ペア成分が返報的（reciprocal）である」(Coulthard 1985：69）点では、共通していると見なされる。

隣接ペアの“発見”過程からいうと、この「出会いの挨拶－出会いの挨拶」タイプが隣接ペアのプロトタイプであったのではないかと思われる。会話分析の創始者サックスは、1964年の講義で、会話の開始部に繰り返し現れる「出会いの挨拶」の交換（例：「やあ（Hi）－やあ」）に着目しており（Sacks 1992［1］：4)、1968年の講義で「発話ペア」「隣接ペア」の用語を充てている

(Sacks 1992 [2]:62)。また「隣接ペア」概念を定式化した初期論文でシェグロフとサックスが着目したのも、会話の末尾で交わされる「さよなら」等の「終結の交換(terminal exchange)」とその前置き(pre-closing)である(Schegloff & Sacks 1973:289−327)。このようなペアを成す定型的な発話連鎖が他にないかを探索するなかで、「質問−返答」「申し出−受け入れ/断り」等のシークエンスが隣接ペアとして"発見"されていったといってよいだろう(Sacks 1992 [2]:521)。

しかし、よく観察してみると、この「出会いの挨拶−出会いの挨拶」タイプは、他の隣接ペアとは異なる性格をもつことがわかる。すなわち、これらは、「同類の発話を交換する」や「第一ペア成分に対し第二ペア成分が返報的である」という発話間の関係における特徴のほかに、会話全体(an overall conversation)(および「対人的な出会い(a social encounter)」)の冒頭または末尾でそれぞれ原則として1回しか現れない(=使えない)という会話構造上の制約がある。この特性は、「質問−返答」や「申し出−受け入れ/断り」などが1つの会話内に複数回現れても不自然でないのと対照的である。

この点からいうと、「挨拶」は確かに「発話(utterance)」ではあるが、会話内における通常の「発話」とは異なる。それは、ゴフマンが明確に述べているような「対人儀礼(interpersonal ritual)」(Goffman 1981:64)と見なすべきである。例えば「知り合い」どうしが「出会いの挨拶」を交換するだけで「会話」に展開しない「通りすがりの挨拶(passing greetings)」(Goffman 1971:75)という現象もよく観察される。また「会話」に展開するケースに限定しても、「出会いの挨拶」の交換の主な働きは、当事者の間に「[会話の]チャンネルが開かれたことを明示する」(ibid:77)ことにある。したがって、意味あるメッセージに思えない「おはよう」等の同一表現の繰り返しや、「よう」−「あら」といった感動詞の交換でも、十分役割を果たす。そして、「出会いの挨拶−出会いの挨拶」では、互いを認識したこと、会話状態への移行を許可したことを示しさえすればよく、「別れの挨拶−別れの挨拶」(とその前置きの交換)では(会話の終息と)出会いの終結の意思を一方が示し他方が受け入れたことを示しさえすればよいから、二部構成の交換で実質的な働きを完遂する。例えば「おはよう」−「おはよう」の隣接ペアは、後に会話が続く可能性が高いけれども、会話的相互行為の完結性からみると「おはよう」−「おはよう」で"ひと区切り"がある[3]。

このように、別の話者が隣接したターンでペアを成す各々の発話を産出し、2つの発話で基本的な役割を完結するという意味で、「出会いの挨拶−出会いの挨拶」と「別れの挨拶−別れの挨拶」は、「隣接ペア」という用語に最もふさわしい相互行為パタンを形成しているといえる。しかし、それらは最も形式化=儀式化された(formalized)発話ペアであるがゆえに、実質的な会話を構成する「発話」からは最も遠い位置にある。

(2)「質問−返答」タイプ

次に、隣接ペアの例として最も頻繁に言及される「質問−返答」タイプについて検討してみよう。この隣接ペアは、「補完的なターンのタイプが含まれるが、それらは相対的に特定されていない」と定義されていた。すなわち、第一ペア成分と第二ペア成分との関係は形式上「補完的」でなければならないという制約はあるが、それ以外の点で第二ペア成分の選択肢は相対的に限定されていないタイプである。確かに「返答(answer)」はその「質問」に答えて(answer)いさえすればよく、内容的にどのような「返答」かはほとんど制約されない[4]。

ところで、この条件を充たす隣接ペアは、「質問−返答」しかないのであろうか。会話分析で隣接ペアに数えられているもので、前述の「出会いの挨拶−出会いの挨拶」タイプとは区別され、後述の「申し出−受け入れ/断り」タイプにも属さないもののうち、ペアを成す発話間の関係が「補完的(complementary)」なものとして、「呼び出し(summons)−応答(answer)」が挙げられるだろう。「ねえ」−「うん」、「あのー」−「はい」、「もしもし」−「はい」などがその例であるが、確かに「質問−返答(answer)」の発話間の関係と「呼び出し−応答(answer)」の発話間の関係とは、第二ペア成分が同じ英語[5]であることからも、類似しているといえる。

しかし、この2つの隣接ペアは、「出会いの挨拶−出会いの挨拶」と「別れの挨拶−別れの挨拶」とが1つのペア・タイプに分類されるのと同じ意味で、ひとまとめにできるのだろうか。また、この「質問−返答」タイプの隣接ペアは、特性や機能の面で、相互に、また他のペア・タイプといかなる類似性あるいは差異性があるのだろうか。これらの点について検討していってみよう。

①「呼び出し−応答」

「呼び出し−応答」は、「質問−返答」と同様、第一ペア成分と第二ペア成分とが「補完的」なペア・タイプといえるが、会話構造的には別の特徴をもつ。すなわち、「呼び出し−応答」は、ゴフマンのいう「交互行為(an interchange)」[6]の冒頭にのみ現れ、しかも1つの交互行為に原則として1回しか現れないということである。一見「出会いの挨拶−出会いの挨拶」と同じと思われるかもしれないが、「出会いの挨拶」が会話のチャンネルを開くだけなのに対し、「呼び出し」が特定の用件や話題をめぐる交互行為の開始のために会話のチャンネ

ルを開く点で、両者は微妙に異なる。例えば、その日初めて会った友人学生どうしは「出会いの挨拶」の交換により会話のチャンネルが開かれた状態に入る。そして、その後彼らが一緒にいると「会話をしてもしなくてもよい状態（an open state of talk）」(Goffman 1971：70）となるが、しばらく会話のない状態の後に一方が会話を再開しようとする際「呼び出し」が再度必要になる（次の［シークエンス（1）］を参照)。この例から「呼び出し」は、会話構造的に「出会いの挨拶」から区別される独自性をもっていることがわかる。

［シークエンス（1）］[7]

01A：「**ねえ**」(**呼び出し**)

02B：「うん。なに？」(応答＋質問)

03A：「**この問題、教えてくれる？**」(要請［＝**用件**］)

04B：「うん。どれ」(応答＋質問)

また、例えば「路上で見知らぬ人に道を尋ねる」ケースのように、当該人物への社会的接触が即、用件をめぐる交互行為の開始であるケースにおいても、「呼び出し」が用いられる（［シークエンス（2）］を参照)。

［シークエンス（2）］

01C：「**あのー、すみません**」(呼び出し)

02D：「はい」(応答)

03C：「**ちょっとお尋ねしたいんですが**」(要請)

04D：「はい。何でしょうか？」(受け入れ＋質問)

05C：「**動物園は、この先ですか？**」(質問［＝**用件**］)

そして、これをシークエンスの展開構造に引きつけていうと、「呼び出し－応答」は、単独で用いられることはなく、「呼び出しの理由」＝「用件」を直後に必ず後続させる。すなわち、「呼び出し－応答」は「前置きシークエンス（pre-sequence)」としてしか用いられない。後述のように、「質問－返答」が前置きシークエンスとして用いられることもあるが、「質問－返答」はそれに限定されない点で、「呼び出し－応答」とは異なる。串田は、この特性を次のようにまとめている。

「対化された連鎖組織は、より長い発話連鎖の「前置き連鎖（pre-sequence)」として用いることができる。「呼びかけ－応答（summons-answer)」という隣接ペアはこの働きのために特化した連鎖組織であり、「非終点性（nonterminality)」という特性を持つ。この連鎖組織の終了は相互行為全体の終了を適切に構成しない。呼びかけは、応答のあとの第三の位置で、少なくともひとつの行為が呼びかけた者によって行われることを投射する。」(串田 2007：68)

このように、「呼び出し－応答」は、使われる局面が限定されているという点で、会話構造上、「出会いの挨拶－出会いの挨拶」タイプに似ているが、二部構成の交換で完結することはないという点で、「出会いの挨拶－出会いの挨拶」タイプのような隣接ペアとしての相対的な独立性はない。すなわち、「呼び出し－応答」は、つねに本題である用件の前駆の働きをする従属的で特化された、独自の隣接ペアということになる。

②「質問－返答」

もう1つの「質問－返答」は、隣接ペアの例として最も頻繁に言及されるものであるが、最も自明で単純なように見えて、実はかなり複雑で多くの問題を含んでいる。したがって、ここでは、ペア・タイプの分類に関係する面と「ペア」特性に関する面に限定して考察する。

まず前者の面だが、「質問－返答」と「申し出－受け入れ／断り」タイプとの境界線は、思うほど画然としていない。次のようなシークエンスを想定してみよう。

［シークエンス（3）］

01E：「今何時？」

02F：「2時15分」

このようなシークエンスを隣接ペアとして規定するとしたら、ほとんどの人は躊躇なく「質問－返答」だと見なすはずである。しかし、02Fのターンが以下のような発話だったら、どうだろうか。

［シークエンス（4）］

01E：「今何時？」

02F：「あっ、ごめん。腕時計してきないの」

このシークエンスで02Fを「質問」に対する「返答」と見なせないわけではないが、「要請」に対する「断り」と理解するのが自然であろう。「質問は要請の一形態—情報を求める要請—である」(Goffman 1971：162）という指摘がここで説得力をもつ。すなわち、統語論的な形態からは「疑問文」＝「質問」とされる「今何時ですか？」という発話は、語用論上は「今何時か教えてください」という「要請」に等しいということである。一見単なる「質問－返答」にみえるシークエンスが、次の［シークエンス（5）］のような構造を潜在させている。その前段が省かれ、表層に現れているのがゴシック体の部分である。こうした潜在構造は、先の［シークエンス（4）］のような展開の際に表面化する。

［シークエンス（5）］

01E：「ねえ、時間わかる？」

02F：「うん」

03E：「**今何時か教えてくれる？**」

04F：「いいよ。**2時15分**」

そこから翻って考えると、「質問－返答」と分類されている隣接ペアのなかに、別のタイプに分類されるべき隣接ペアが紛れ込んでいる可能性がある。例えば「何か買ってくるものある？」は統語論的には「質問」だが、実質的には「申し出」である。これらの次元を混同して

いる例が、会話分析の記述に散見される。次の［シークエンス（6）］は、会話分析の「教科書」的な記述（Levinson 1983：304）で「挿入シークエンス」の例として記載されているもので、（　）内が原著の規定である。01Gの発話は形式上は「質問」だが、「要請」と規定した方が正確である[8]。01Gを「ビールください」に置き換えても、実質的に何も変わらない。

［シークエンス（6）］

01G：「ビールもらえますか？」（質問1）[→要請]
02H：「21歳以上？」（質問2）
03G：「いや」（返答2）
04H：「じゃあ、だめだ」（返答1）[→断り]

次に、「質問－返答」のなかには、二部構成の交換で完結しないものが数多く含まれている。「相手から質問されればこちらは返答しなければならない」というのは経験的に事実だが、それで当該のやり取りが終わるのではなく、「なぜその質問がなされたのか」の疑問が解決されてはじめて完結をみるということである。

その1つの形態として、「質問－返答」が、先の「呼び出し－応答」に準じた形で、「前置きシークエンス」として用いられるケースがある。［シークエンス（7）］の03J－04Kの箇所がそれである。Jは次に「誘い」を切り出そうと思っているから、この「質問－返答」を前置きシークエンスと意識しているのは当然だが、Kも『次に何か「用件」が続くだろう』と予期しているから、前置きシークエンスと感知しているはずである。したがって、このやり取りでは、05Jで「質問した理由」として「用件」が現れることが必須となる。

［シークエンス（7）］

01J：「ねえ」(呼び出し)
02K：「うん」(応答)
03J：「今晩ひま？」(質問)
04K：「別に用はないけど」(返答)
05J：「じゃあ、ごはん食べにいかない？」

もう1つ、これと相補的な形態として、相手の質問の意味はわかるが、質問の意図がわからないため、それを明らかにすべく「反問」するケースがある。［シークエンス（8）］の04Mのゴシック体の箇所がそれである。

［シークエンス（8）］

01L：「ねえ」(呼び出し)
02M：「うん」(応答)
03L：「今日、何かいいことあった？」(質問)
04M：「別にないけど、**どうして？**」(返答＋**反問**)
05L：「星占いで君の星座が第1位だったから、何かいいことあったんじゃないかと思って」(返答)
06M：「なあんだ！」

実際は、どの質問でもその意味だけでなくその意図も問題になっているはずだが、文脈や状況その他の手がかりから意図が了解できるケース（「質問－返答」で完結するもの）と了解できないケース（上記の例）があるという違いなのだろう。なぜなら、隣接ペアに限らず、会話参加者につねに湧き上がる疑問は、「なぜ・それを・今・私に？（why that now and to me？）」だからである。それが納得できなければ、「質問－返答」を含むやり取りは未完結の状態におかれたままである。

その他にも、「質問－返答」という隣接ペアの規定から外れるケース[9]が少なからず存在するが、そうしたものも含めて除外していったとき、純粋に「質問－返答」といえる隣接ペア、そして二部構成で完結的なユニットを成すものは、意外に多くないことがわかる。例えば先の［シークエンス（6）］で02Hと03Gの挿入された「質問2－返答2」は、確かに純粋な「質問－返答」ではあるが、主要なやり取りである「要請－断り」に従属した副次的な交換として意味をもつのである。

（3）「申し出－受け入れ／断り」タイプ

さて最後に、隣接ペアの下位タイプとして「申し出－受け入れ／断り」タイプに触れておこう。これが独自のグループを成しているのは、これに分類される隣接ペアが複数あることだけでなく、このタイプの隣接ペアの第二ペア成分には「優先的／非優先的（preferred/dispreferred）」という特有の序列構造が存在することによる。

前者の面、すなわち含まれる隣接ペアの多さの面からいうと、「申し出－受け入れ／断り」タイプは際立っている。このタイプには、「申し出－受け入れ／断り」のほか、「要請－受け入れ／断り」「誘い－受け入れ／断り」「提案－同意／不同意」「評価－同意／不同意」「苦情－謝罪／言い訳」などが指摘されている。

後者の「優先的／非優先的」の面だが、これに関しては、特に非優先的な第二ペア成分の特徴がかなり詳しく分析されている（Levinson 1983：334－335）。例えば「誘い」に対して非優先的な第二ペア成分とされる「断り」には、次の［シークエンス（9）］の【　】で示したような要素が付随して発話が長くなることが指摘されている。

［シークエンス（9）］

01S：「今週の土曜、うちに遊びに来ない？」(誘い)
02T：「うーん【遅れ】、行きたいんだけど【前置き】、ちょっと無理かな（断り）。町内会の行事が土曜の午後あるんだ、嫌なんだけど【言い訳】」

ペア・タイプとしてはこのような特徴づけで十分発見的な価値がある。だが、このタイプの隣接ペアがもつ会話構造上の特性や他のタイプとの関係については、全く明らかになっていない。ここで、会話構造における特性

として指摘すべきなのは、このタイプの隣接ペアの多くが「交互行為」[6]の主構造を成すものだという点である。「要請－受け入れ／断り」「申し出－受け入れ／断り」「誘い－受け入れ／断り」「提案－同意／不同意」「苦情－謝罪／言い訳」は、すでに折にふれて暗示してきたように、会話構造上、ひとまとまりの会話的相互行為の「本体」部分を構成する隣接ペアである。こうした主－従の関係は、例えば「質問－返答」が「要請－受け入れ／断り」「誘い－受け入れ／断り」などの「前置きシークエンス」として置かれたり、「脇道シークエンス（side sequence)」として挿入されたりすることは考えられるけれども、その逆はふつう考えられないことからもわかる（[シークエンス（10)] を参照)。また、「申し出－受け入れ」では、その直後に「後添えシークエンス（post-sequence)」とでも呼ぶべき形で「質問－返答」が続くことが考えられるが、ここでもその主－従の関係は明らかである（[シークエンス（11)] を参照)。

[シークエンス（10)]

01V：「ねえ、今晩ひま？」(呼び出し＋質問)
02W：「別に用はないけど」(返答)
03V：「じゃあ、飲みに行かない？」(誘い)
04W：「どこ行くの？」(質問)
05V：「駅北口の焼鳥屋」(返答)
06W：「じゃあ、行こうかな」(受け入れ)

[シークエンス（11)]

01X：「買い物行ってこようか？」(申し出)
02Y：「うん、お願い」(受け入れ)
03X：「何買ってくればいいの？」(質問)
04Y：「えーと、豆腐とネギ、あと鶏肉」(返答)
05X：「卵は？」(質問)
06Y：「卵はある」(返答)

「申し出－受け入れ／断り」タイプに分類される隣接ペアの全てが交互行為の主構造を成すとはいえないと思うが、少なくともこのタイプには、上述のように会話構造上の位置づけがより明確な隣接ペアの一群が確かに存在している。ただ、このタイプの隣接ペアは数が多く、一般化の可否には、上述のような換入テストやデータに基づく検証などが必要となるため、ここでは、考察の基本的な方向性を示唆するにとどめざるを得ない。その本格的な考察は、稿を改めて論じたい。

3．結びに代えて

以上、シェグロフによる隣接ペアの下位分類に沿う形で、やや断片的かつ簡単にではあるが、個々の隣接ペアがもつ独自性、または他の隣接ペアとの違いを摘出し、それらがもつ制約についても考えてきた。この作業を行うには、シェグロフのいう「ペア・タイプ」の面、すなわち第一ペア成分と第二ペア成分の関係の面に注目するだけでは不十分だと考えられたため、「会話構造」という観点を加えて考察してきた。十分な考察とはいえないが、この試行により、「一様」にみえた隣接ペアをいったん個別化して、その各々を、発話による構築物として一定の“形”をもった会話のなかに位置づけていく作業の第一段階は達成できたと思う。

確かに、会話分析においても、会話全体の展開構造を射程に入れた分析は、(「開始部」と「終結部」が中心ではあるが)「全域的組織（overall organization)」という観点で行われている。また、隣接ペアと隣接ペアの間の構造的な関係についても、「拡張的シークエンス」という形で分析がかなり進められてきた。しかし、そうした分析においても、「隣接ペア」を自明の基本単位として扱う姿勢は保たれていた。それがなぜ問題かというと、「隣接」という位置関係でみているかぎりどうしても発話間の関係に力点が置かれがちになり、「ペア」にこだわるかぎり“ひと続きの発話連鎖”としての会話的相互行為を人為的に切り分ける形になりやすいからである。

したがって、本当に必要なのは、会話分析の創始者たちの定義や規定もいったん“括弧に入れ”て、会話的相互行為の実態に即して、その構造を解明する作業ではないだろうか。「会話分析」が生み出してきた概念はもはや会話分析「内部」だけで議論されているものでなくなってきている以上、創始者たちの「定義」を“疑問の余地のない”「定理」のように自明視する段階ではなくなってきている。もし仮に会話分析において、隣接ペアをはじめ多くの「仮説」的な概念が「既成概念」と化し、分析家たちの思考を呪縛しているとすれば、そうした事態は、会話分析の理論的背景をなしている「エスノメソドロジー」が批判した当の事態であるといえる。

[註]

（1）「前置きシークエンス（pre-sequences)」「挿入シークエンス（insertion sequences)」「脇道シークエンス（side sequences)」などの「拡張されたシークエンス（expanded sequences)」も「隣接ペア」の理論的な展開ではあるが、別の独自な問題を含むので、ここで主題的には論じない。本論のテーマに関連する範囲で限定的に触れる。

（2）「会話構造」とは、会話の当事者たちに「構造感（a sense of structure)」をもって感じ取られるスクリプトで、1つの会話全体や交互行為（註（6））の開始から終結までの展開をある程度制約する規範的なパタンのことを指すものとする。

（3）こうした“ひと区切り”の存在は、特に「ちょっとした知り合い」関係にある人との出会いで実感されることが多い。その場合、「おはようございます」－「おはようございます」の交換は円滑に行えるけれども、次に話すべき会話の話題が思い浮かばないような局面で、“ひと区切り”が“苦痛な沈黙の間（ま）”として経験されることがある。

（4）この制約の緩さは、「質問」のうち、「どう思う？」とか「なぜなの？」といったWH-questionを中心とする「開かれた質問（open-ended questions）」について妥当する。一方、「彼知ってる？」といったYES/NO-questionの場合、返答の選択肢は基本的に「はい／いいえ」の２つしかなく、この点では、次の「申し出－受け入れ／断り」タイプに似てくる。もし「質問」の多様性に対応する「返答」のこうした幅の広さをもって「相対的に特定化されていない」とシェグロフが理解しているのだとすれば、それは概念の括り方が広いためにすぎない。「質問－返答」をもう少し細かく区分する必要があると思われる。

（5）英語ではどちらも同じanswerだが、意味合いが若干異なるので、「質問－返答（answer）」と「呼び出し－応答（answer）」に訳し分けておく。前者の用法answer the question（質問に答える）と後者の用法answer the phone（電話に出る）では、行為の内実が異なるであろう。

（6）「交互行為（an interchange）」は、ゴフマン独自の用語である。いくつかの規定がなされているが、対面的相互行為をシークエンス構造から捉えた概念で、ある用件や話題をめぐって開始・展開され、その用件が満たされたりその話題についての話が尽きることによって自然な終結を迎える（会話的相互行為をも含む）相互行為の単位を指す。詳しくは（薄井 2002）を参照のこと。

（7）本論のシークエンス例は、実際の会話を録音したものではなく、仮想例である。

（8）本文のケースとは異なるが、「質問」と「要請」の相対性を示す別の事例として、例えば一方が「質問」のつもりで「ちょっと寒くない？」と言ったのを、他方が「寒いから窓を閉めてほしい」という「要請」として聞いて窓を閉めるケースなどが考えられる。これは、聞き手の受け取り方（「要請」）および反応（「受け入れ」→「実行」）によって、遡及的に第一ペア成分が「質問」から「要請」に規定され直すという事態である。

（9）「質問」の直後に「返答」が続かなくても不自然と見なされないケースは、挿入シークエンス以外にも多々ある。例えば詰問調の「私に何をしろって言うの？」といった「修辞疑問」に近い質問では、むしろ「返答」がないのが一般的である。また、「質問」の内容が重大な意思決定を伴うため「返答」するまでに熟慮を要するような場合、「返答」は隣接する位置に生起しない。その他「なぞかけシークエンス（riddle sequence）」のように「質問」を発した人が次の次のターンで正解の「返答」を自ら行うパタンもある。

［引用文献］

Coulthard, M. (1985). *An Introduction to Discourse Analysis* (second edition). Longman.

Drew, P. (1998). Speakers' reportings in invitation sequences. In J. K. Atkinson & J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action : Studies in Conversation Analysis.* Cambrige University Press.

Goffman, E. (1971). *Relations in Public.* Harper and Row.

Goffman, E. (1981). *Forms of Talk.* Basil Blackwell.

Heritage, J. (1984). A change-of-state token and aspects of its sequential placement. In J. K. Atkinson & J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action : Studies in Conversation Analysis.* Cambrige University Press.

串田秀也（2006）.『相互行為秩序と会話分析』. 世界思想社.

Levinson, S. C. (1983). *Pragmatics.* Cambridge University Press.

Pomeranz, A. (1978). Compliment responses : notes on the cooperation of multiple constraints. In J. K. Atkinson & J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action : Studies in Conversation Analysis.* Cambrige University Press.

Sacks, H. (1992), *Lectures on Conversation*, 2vols. Basil Blackwell.

Schegloff, E. (1988). Goffman and the Analysis of Conversation. In P. Drew and A. Wooton(eds.). *Erving Goffman.* Polity Press.

Schegloff, E. (2007). *Sequential Organization in Interaction.* Cambridge University Press.

Schegloff, E. & Sacks, H. (1973). Opening up closings. *Semiotica* 8.

Stenström, A.-B. (1994). *An Introduction to Spoken Interaction.* Longman.

薄井　明（2002）. 会話的相互行為の自然な基本単位.『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第９号.

"Adjacency Pairs" Reconsidered

Akira USUI*

Abstract : *Adjacency* pairs have become one of the most inportant notions in Conversation Analysis (CA), and have long been treated as if they were unquestionalbe, but CA's definition of them is really formalistic and therefore is loose. Consequently, adjacency pairs have been considered nearly uniform. To break this formal uniformity, E. Schegloff, who formulated the denfinition, tried distinguishing among the three pair–types. Indeed his viewpoint about pair–type is useful to grasp the relationships between utterances, but is almost useless to analyze the conections between adjacency pairs and the relationships of some adjacency pair to an overall conversation a part of which it constitutes. Instead, the viewpoint of conversation strucure would enable us to find the identity of each adjacency pair and locate some of the adjacency pairs on a "sketch map" of the structre of an overall conversation.

Key Words : adjacency pair, pair–type, conversation structure

Department of Integrated Human Sciences